

「仕事と家庭」

皮膚科女医の場合

馬場 直子

神奈川県立こども医療センター皮膚科部長

人間と深くかかわる仕事がしたい、そう思って医学部を受験した。私の母は専業主婦で、女性は子どもを育て家庭を守ることが使命と信じていた人なので猛反対したが、父は応援してくれた。医学部に入ってみると100人中女子は7人だけ、前後の学年も女子は6人で常に一定数であった。ある教授からは「君たち女子は多くても7人までと決まっている。君たちが入学したために1人の有望な男子を落としたわけだから、その分まで頑張らないといけないよ」ともいわれた。いまなら大問題になりそうな話だが、そのときはその言葉を素直に受け入れ、なんだか申し訳なく思い、石にかじりついても一生頑張らなければと心に誓った。

そういうスタートだったので、卒業後もどんなことがあっても私には仕事を辞めるとか、休むという選択肢はなかった。28歳で会社員の夫と結婚し、3年間の不妊治療の末、31歳で長男を生んだ。生後2カ月から預かってもらえる保育所を探し、産休明けから当直も手術もいままで通りこなし、故郷から母に来てもらい、病気のときや自分で迎えに行けないときは行ってもらい、母も疲れたときは、遠方の主人の実家にしばらく預けるという綱渡りのような生活が続いた。主人は医師ではなく当直や土日の学会出張もなかったため、私が不在のときはよく子どもの面倒を見てくれたので助かった。

しかし、最大のピンチは次男が生まれてすぐに先天性心疾患があるとわかったときであった。しかも産休明けから医局長になることが決まっていた。新生児期から心不全だったので、せっかくミルクを飲ませても、すぐに全部吐き出してしまう。朝の忙しいときに、やっとのことで飲ませたミルクを全部吐き出されてしまうと、こちらまで泣きなくなった。1日3回の薬を飲ませることも、人に頼むのは大変だった。

そんな次男もなんとか3歳までこぎつけたとき、2人生み終えた者として、こども医療センターでの一人医長の話が舞い込んだ。いわれるままに赴任したものの、まさかの3人目の妊娠が判明し、このときばかりは眼の前が真っ暗になった。誰にもいえずひどいつわり



に耐えながらも1日も休めなかった。お腹が大きくなって隠し通せなくなったころ、ついに教授と院長に平伏して最小限の産休をいただきたいとお願いし、産休の3ヵ月間は医局から日替わりで代診医を派遣していただいた。

かくして3人のドタバタ子育てと一人医長という絶対休めない生活が始まったわけだが、この2つのワークライフバランスは実に相性がよかった。患児たちはみんな私の子どものような気がして可愛いくてたまらなかったし、お母さんの気持ちにも同じ母親として共感できた。子育ての経験が仕事にこんなに役立つと思ったことはいままでなかった。自分の子育てにおいても仕事上での経験が何かと役立った。少々の病気であろうと、こども医療センターで出会う子どもたちに比べればどれほど元気かとも思えた。家では病院の子どもたちのことを、病院では自分の子どもたちのことを思い出しながら、どちらの仕事も楽しくできた。そういう気持ちがモチベーション維持につながっていたと思う。

いま、気がつけば3人とも成人し、長男はもうすぐ結婚して家庭を持つ。心臓病だった次男はまるで恩返しをするべく小児科医になっている。まさかの3人目として職場で生んだ長女は、自らが生まれたこの病院に実習に来ている。

あっという間に卒後35年、若い人に伝えたいことは、①自ら選んだライフワークなのだから信念を持って生涯続けて欲しい、②子育てなどで大変な時期はペースダウンしてもよいので、その間迷惑をかけている人に感謝の気持ちを忘れないこと、③一人で全部抱え込まずに、協力してくれる味方を増やすこと、この3つである。